

巻頭言

大学に新設された舗装研究室

高橋 茂樹



私が初めて舗装に出会ったのは、大学3年の授業だったと記憶している。まだ漠然と、大きな物を作る仕事に携わってみたいと思っていた時に、何だか面白そうだなとアスファルトの話に興味を持ち、土木の中から道路工学講座を志望し、卒論では北海道内の道路のひび割れ調査やアスファルト材料の低温性状試験に勤しんでいた事を思い出す。

しかしその後、舗装を教える大学は減り続け、舗装を学んだ卒業生として、また、舗装屋として産官学の関係者とともに、このままだと学生が舗装を学べる教育機関が日本から無くなってしまおうという強い危機感を抱いていたが、この度、金沢工業大学から、工学部（環境土木工学科）の中に舗装研究室を新たに立上げたいという大変ありがたい話を聞き、その役に立てるならと、長年勤務していたNEXCOを退社し、この春から大学の教員となった次第である。

本学では、1967年に土木工学科が設置され、以来、社会的な風当たりが強くなった時期においても学科の名称変更は行わず、土木の名前を残したまま今に至っており、この春入学した1年生からは学科の定員をこれまでの80名から100名に増員している（大学全体では、4学部12学科で6千人強の在籍）。

この大学は、大変ユニークな教育方針を掲げており、学生を社会に役立つ人材へと育てる手法が並外れて充実している。その成果は、入学時の偏差値とは異なる様々な指標で、国内有数の高い評価を得ており、卒業生を受け入れている産業界からの評価も然りである。

就職氷河期においても就職率100%を誇り、加えてメディアを通じた積極的な広報戦略もあり、地方大学としては珍しく全国から学生が多く集まってきている（地元北陸3県の出身者は僅か1/4程度）。

金沢工大に舗装研究室が開設された理由は、舗装の仕事は土木分野で大きなシェアを占めており、これからも全国で多くの仕事がある分野のため、これを学び人材が輩出できる場が必要とのことであった。実学重視の特徴が色濃く出た考え方であり、人材不足に悩む企業にも喜ばしい決断だと思われる。

本学では、3年生の後学期から各研究室に配属となるが、新設の研究室であるため、前学期のうちに学生へのPRを兼ね、道路・舗装工学の授業を行ったところ、これらに興味を示す学生が多く、無事9名の希望者を令和5年度卒業予定の第1期生として迎えることが出来た。これからゼミ合宿を皮切りに、毎週1回、プラントやアスファルト舗装とコンクリート舗装の舗設現場の見学を織り交ぜながら舗装勉強会を行いつつ、4年時の卒論テーマを準備することになる。

新参研究室のため、研究に資する十分な実験室を学内に準備できないことから、舗装の材料メーカーや道路会社とのタイアップによる共同研究をメインに考えており、企業の研究所が有する試験機や機材を使わせて頂きながら、大学らしい研究テーマを設定し一緒に出来ないか、協力して頂ける企業を鋭意探しているところである。本学には機械工学科やロボット工学科などもあるが、舗装に興味を持ちながら、舗設機械にも関心を示すものが出て来ればと思っている。

私自身、これまでの経験から、舗装の技術開発や品質向上には材料とともに施工機械が大変重要だと感じており、舗装を勉強した若者が、それを作る建機の開発や改良に携わるようになってくれる事も大いに期待しており、この辺りも念頭に、学生の教育や人材育成に励んでいきたいと考えているところである。